1. 記紀神話を歴史として読む

日本古代史ネットワーク　設立記念・講演会

“古代史の新しい解明”を目指す

2020年11月21日（土）
会場：東京都品川区 きゅりあん

丸地　三郎

目次

I.　日本の古代史に欠けているもの　－　問題の提起　－
　1）戦後75年たった現在の古代史
　2）歴史としての読む主な神話　①　②　③　④
II.　**神話を歴史として読むと云うこと**
　1）文学として読むこととの違い
　2）時間軸の整理
　　✓　神話の事件と登場人物
III.　事件の順番が判明すると
　　✓　東征の物語は、会議から始まる。
IV.　神武東征
　①大和攻略開始
　　✓ 考古資料が記紀の神話を裏付ける
　　✓ 大阪の古地図
　　✓ 第二次高地性集落
　②　熊野灘の　遭難
　　✓ 考古学上の疑問が記紀神話から解消
　③　大和朝廷成立時の神武一行
　④　神武達の最初の政策実行　政略結婚
V.　手研耳命(タギシミミノミコト)の乱と後継天皇
　✓ 九州から来た天孫族の一族の抹殺
　✓ 出雲族の事代主とその一族の勢力
VI.　まとめ と 展望

Ⅰ　日本の古代史に欠けているもの

ー　問題の提起　ー

1）　戦後75年たった
　　現在の古代史

神話の時代

卑弥呼・邪馬台国

この部分の歴史が知りたい！

歴史年代

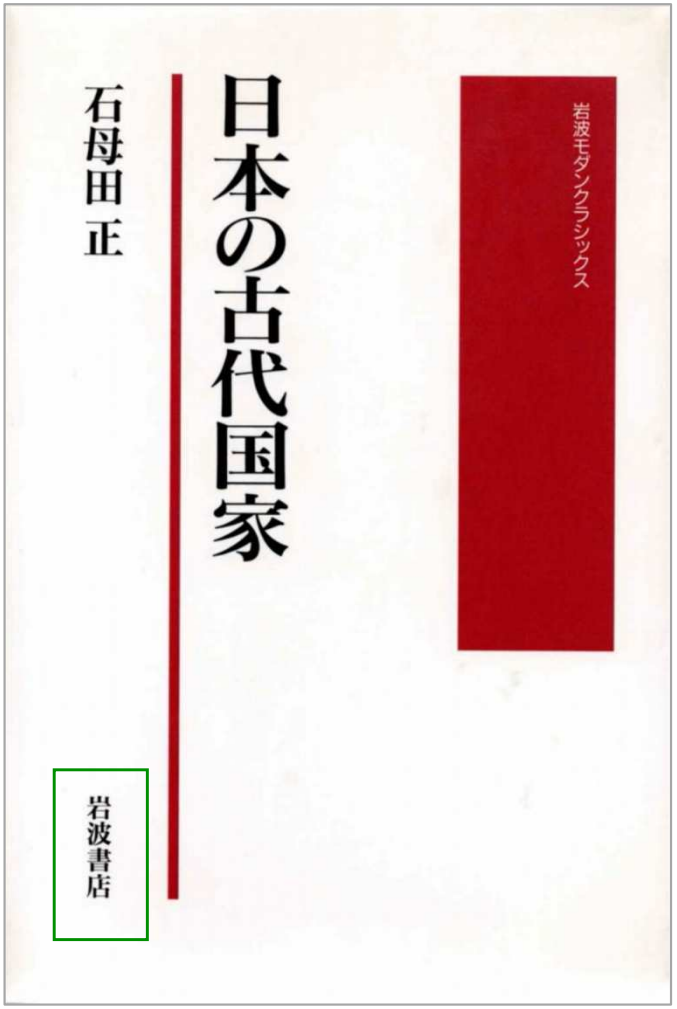
飛鳥時代
奈良時代
平安時代
鎌倉時代
室町時代
安土桃山時代
江戸時代
明治・大正・昭和

考古学者だけが、考古学と中国文献史料のみに基づき記述

石器・人骨	石器・土器	石器・土器・金属器・水田	土器・古墳
旧石器時代	縄文時代	弥生時代	古墳時代

歴史学者が、日本の文献史料・中国等の文献史料、考古学史料、その他に基づき記述

権威ある古代史の専門書



一九七〇年十一月

石母田　正

目　次

はしがき
第一章　国家成立史における国際的契機……一
第一節　交通の問題　戦争と内乱の周期……二
第二節　権力集中の諸類型　推古朝……三
第三節　二つの方式　大化改新……四
第四節　第二の周期　天平期……七
第二章　大化改新の史的意義……九
第一節　改新の課題　史料批判の問題……九
第二節　人民の地域的編成　王民制から公民制へ……一三
第三節　改新と東国首長層……一四

- 大化の改新以前は、魏志倭人伝のみ

吉川弘文館の日本古代の歴史１

- 旧石器・縄文時代・弥生時代と記述が続くが、全て考古資料に基づく記述のみ。
- 唯一の例外が「魏志倭人伝」による「女王卑弥呼と邪馬台国」
- 倭の五王の時代から、文献による記述が始まる。

目次

日本列島の文化のあけぼの—プロローグ……1
日本国・日本人とは何か／五つの時代区分／各時代の時期細分／北海道・沖縄の時代区分

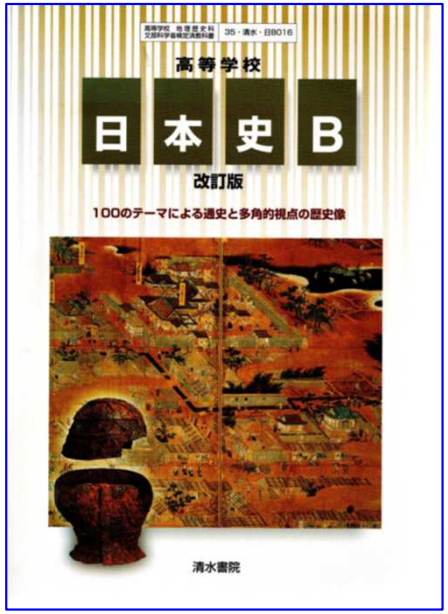
一　旧石器時代の日本列島……8
1　人はいつ日本列島に姿をあらわしたのか　8
赤土の中の人類文化／旧石器文化はどこまでさかのぼるか
2　日本列島の形成と旧石器文化—自然環境と動植物相　12
氷河時代／日本にもゾウがいた
3　火山灰層と旧石器文化　15
石器と作り方／火山灰層と旧石器の変遷／旧石器文化の地域性／旧石器時代人の顔つき・体つき
4　旧石器人の住居と暮らし　22
住居と集落／環状ブロック群とは何か／大型獣を捕える—落し穴—／衣服・装身・墓・祈り

二　縄文人の生活と社会—高度な狩猟・採集文化……29
1　道具と技術—生活の革新　29
温暖化と新文化の登場／縄文文化の時期区分／縄文文化の東西
2　縄文土器の発明—新文化の象徴　35
土器の発明／縄文土器のはじまり／本格的な縄文土器の成立／土器の多様化—後・晩期—／縄文土器の形と用途、美しさ／磨製石斧の発明／槍から弓矢へ—狩猟の革新—／高度な漆の技術
3　住まいとムラ、墓地　48
住まい／さまざまな生活跡／環状集落—広場を中心としたムラ—／墓と墓地／環状列石と周堤墓
4　縄文人の食生活—山の幸・海の幸　59
木の実が主食／シカ・イノシシ狩り／暮らしを知る宝庫—貝塚—／豊かな魚類／縄文人の一年／農耕はあったか
5　縄文社会のしくみ—呪術が支配した社会　72
タブーと呪い／土偶と石棒／祭場の姿／縄文人の体つきと抜歯の風習／子供の成長への祈り
6　厚葬のはじまりと王墓の成立　138
新しい墓のはじまり／前・中期の墳丘墓／倭の奴国と金印／クニの成立と王墓／政治的まとまりの形成／瀬戸内東部の円形墳丘墓

四　倭国と前方後円墳の登場……152
1　女王卑弥呼と邪馬台国　152
卑弥呼の登場／邪馬台国の社会／卑弥呼の外交／邪馬台国はどこにあったのか
2　弥生墳丘墓から前方後円墳へ　158
前方後円墳の源流／纒向古墳群／巨大集落・纒向遺跡／卑弥呼の墓／箸墓古墳の年代と被葬者／邪馬台国連合から倭国連合へ／前方後円墳と倭国連合の成立
3　倭国初期の王陵　170
初期の王陵／行燈山古墳と渋谷向山古墳
4　共通する葬送祭式の拡大　174
出現期古墳の特徴／古代国家の成立

五　倭の五王の時代……180

教科書



4 弥生時代はいつはじまったのか

中国文化の波及 中国大陸では，紀元前6000～5000年ころ，長江の中・下流域で水稲耕作がはじまり，やがて農耕文化が定着し，青銅器が発達した。紀元前6世紀ころには，鉄器の使用もはじまり，本格的な鉄器時代を迎えた。戦国時代の抗争を経て，紀元前3世紀の終わりころ，秦・漢（前漢）といった統一国家が生まれ，周辺諸国への影響を強めていった。朝鮮半島でも，紀元前7世紀ころに農耕文化が成立した。紀元前108年には，前漢の武帝が朝鮮半島に楽浪郡など4郡を設置したため，そこを経由して日本と中国の通交関係が生まれた。

弥生文化の成立 紀元前5～4世紀の縄文時代晩期後半に，北部九州で水稲耕作が開始された。その代表的な遺跡には，佐賀県の菜畑遺跡と福岡県の板付遺跡がある。そして西日本では，紀元前3世紀のはじめころに，水稲耕作を基盤とし，金属器（青銅器・鉄器）の使用を特色とする農耕文化が成立し，やがて東日本にも広まった。この文化は，使用された土器の名称にちなんで弥生文化とよばれる。この文化の時代は，紀元後3世紀ころまで約600年間つづき，前期・中期・後期に区分されている。弥生土器は，米などを蓄える壺，煮炊きに使う甕，食物を盛りつける高坏などの種類があり，使い勝手を優先した機能重視の土器であった。

弥生人の生活 弥生時代の水田は，一辺数メートル程度の小区画のものが多いが，畦によって区切られ，排水用や灌漑用の水路を備えた本格的なものだった。田植えを行い，農具には木鍬・木鋤・田下駄・犬足などが使用された。収穫は石包丁によって穂首刈りが行われたが，後期には鉄鎌による根刈りにかわった。脱穀には木臼と竪杵が用いられ，収穫物は高床倉庫などに貯蔵された。

弥生人は，縄文人と同じく一般に竪穴住居に住んでいた。しかし，おもに台地上に住んでいた縄文人と違い，生活の基盤である水田の近くの小高い丘や低地に大きな集落をつくって定住した。

青銅器と鉄器 青銅器と鉄器は，弥生時代のはじめのほぼ同時期に大陸から日本列島に伝えられた。武器としてもちこまれた青銅製の銅剣・銅矛・銅戈は，しだいに刃のない薄いものになり，武器本来の用途を失った。そして，日本独特の銅鐸と同様に，祭りの道具に変化していった。これらは，集落から離れた場所に埋納されていることが多く，いくつかの集落が集まって行った豊作祈願の農耕祭祀に使われたと推定されている。いっぽう，鉄製の工具・農具・武器は実用的な道具として発達した。弥生時代後期には，鉄器が普及し，石器の多くは姿を消した。鉄器は，生産力を増大させるとともに，鉄利な武器として集団間の紛争に威力を発揮した。なお，日本では青銅器と鉄器がほぼ同時期に伝えられたため，世界史的な時代区分である青銅器時代は存在せず，石器時代から直接に鉄器時代に移行したといえる。

5 邪馬台国はどのような国だったのか

社会の変化 弥生時代には，水稲耕作の普及により，安定した収穫が得られるようになり，人口も増加した。米は長期間の貯蔵が可能であるため，米を蓄える者があらわれ，貧富の差や階級が発生した。集落間の利害対立による抗争も多発した。九州から関東地方にみられる環濠集落は，防衛的機能を備えた集落と考えられる。また，共同作業が必要な水田開発のために，集落を超えた集団が形成され，広い地域を統率する有力集団の首長もあらわれた。首長の存在は，多くの副葬品をもつ墳丘墓，周囲を溝で区画した方形周溝墓，相当な規模の墓を もつ墳丘墓などから推定できる。さらに，各地の集団を統合した小国が形成されていった。

小国の形成 紀元前後から3世紀ころまでの日本のようすは，以下のように，中国の歴史書によって知ることができる。

「漢書」地理志には，弥生時代中期にあたる紀元前1世紀に，倭とよばれていた日本が百余りの小国に分立しており，その一部が朝鮮半島の楽浪郡と定期的に通交していたことが記載されている。この史料は，日本に関する最古の文献記録である。

また，「後漢書」東夷伝には，紀元57年に倭の奴国の王が後漢に使者を送り，光武帝から印綬を授けられたこと，107年に倭国王帥升らが生口（奴隷）160人を献上したことなどが記載されている。小国の王らは，後漢の皇帝に朝貢して下賜品とともに印章や称号をもらい，

その権威によって支配者の地位を保ち，小国間の勢力の均衡を維持していた。しかし，後漢が衰退した2世紀後半には小国間で抗争や連合がくり返された。これが，「倭国乱」である。

邪馬台国 中国の歴史書のひとつ「魏志」倭人伝には，2世紀後半に諸国が共同して，卑弥呼を女王に立てたことによって「倭国乱」が終わったと記載されている。卑弥呼は，邪馬台国を都とし，30国ほどの小国を統合していた。また，卑弥呼は呪術的な司祭者（シャーマン）としての性格が強く，女王になってからは宮殿の奥にこもり，人前に姿をみせず，弟が政治を補佐していた。諸国には役人を派遣して統制していたが，とくに北部九州の伊都国には一大率という検察官を派遣した。また当時の倭の社会には，大人・下戸・生口といった身分秩序があり，刑罰や税の制度もつくられ，市も開かれていた。

238年に魏の明帝が，朝鮮半島を支配していた公孫氏を攻撃して滅ぼさせ，楽浪郡・帯方郡を支配すると，翌年の239年に，卑弥呼は大夫難升米を帯方郡に派遣し，魏の都洛陽への上洛を実現させた。魏は卑弥呼に対し，「親魏倭王」の称号と金印紫綬・銅鏡100枚などを授けている。248年ころ，敵対していた狗奴国との抗争中に卑弥呼が死ぬと，人々は女王のために大きな墓をつくった。そのころ男の王が立ったが，国内が再び乱れたため，13歳の壹（台）与を女王とした。壹与は，魏にかわった晋に対して，266年に使者を派遣した。この記録を最後に，倭国についての記載は，しばらくのあいだ，中国の歴史書から姿を消すことになる。

第2章 古代国家の形成と東アジア

1 ヤマト政権はいつどのように出現したのか

4世紀の東アジアと倭国 中国大陸では，3世紀後半に晋が国内を統一した。しかし北方から匈奴などの諸民族が進入したために晋は南に移り，中国は南北に分裂した状態となった。こののち北部では五胡十六国といわれる異民族の王朝がつぎつぎと興った。

こうしたなか，東アジアにおける中国王朝の勢力は大きく後退し，中国周辺の諸民族が自立をめざしはじめ，その多くが国家形成へすすんだ。朝鮮半島北部には，中国東北部からおこった高句麗が進入し，313年，楽浪郡を滅ぼし，強力な統治機構を形成した。南部においてもそれまで韓族が馬韓・辰韓・弁辰（弁韓）などの部族的小国を形成していたが，馬韓地方では百済，辰韓地方では新羅が国家形成へと向かいはじめた。日本列島においても，今の奈良盆地を中心とする近畿地方の有力豪族が連合して政権をつくり（ヤマト政権），4世紀前半ころには，東北地方南部から北部九州に，その勢力を拡大した。

前方後円墳の出現 弥生時代の終わりころから，日本列島各地に有力な首長の墓として，さまざまな形の大きな墳丘をもった墳墓がつくられるようになった。そうした各地の墳墓がもついくつかの要素を総合して，3世紀中ごろ，奈良盆地に巨大な前方後円墳が出現した。その規模や副葬品から判断すると，弥生時代の首長とは

比べものにならないほど強大な力をもつ支配者が出現したことがわかる。

初期の前方後円墳が，奈良県桜井市の箸墓古墳のように，奈良盆地に集中することは，のちのヤマト政権との関係を示している。前期の古墳では，竪穴式石室に長大な木棺を埋葬し，中国製・国産の銅鏡をはじめ，玉類（勾玉，管玉），石製品（鍬形石・石釧・車輪石）など呪術的色彩の濃い宝器類，刀剣・鏃などの金属製武器，甲冑・盾などの武具類が副葬されているが，このことは，葬られた首長が司祭者と軍事指導者の両方の性格をもっていたことを示している。

朝鮮の情勢とヤマト政権 4世紀後半から5世紀にかけて，朝鮮半島では，高句麗・百済・新羅の3国が対立抗争をくり返した。とくに高句麗の勢力は強大でたびたび南下し，百済と新羅は滅亡の危機を迎えている。そこで新羅は高句麗の支配下にはいり，百済は倭国と同盟関係を結んで，これに対抗した。奈良県石上神宮所蔵の七支刀の銘文や高句麗好太王碑文からうかがえるように，4世紀末に倭国は百済の求めに応じて，海を渡って高句麗と戦っている。倭国と百済の交流は，ヤマト政権に先進的な文化や知識をもたらした。これによりヤマト政権は外交権や先進技術を独占することになり，倭国内における，より優位な立場を得ることになった。

2） 歴史としての読む主な神話 ①

物語を思い起こしてもらうために、
大和朝廷成立期までの主な出来事を記す。

国生み・人生みの神話の後、以下が記される。

1. 天照大神(アマテラスオオカミ)と須佐之男命(スサノオノミコト)の対立
   - ①天照大神(アマテラスオオカミ)が武装して、須佐之男命(スサノオノミコト)の到来を待つ
   - ②天照大神と須佐之男命の誓約
   - ③須佐之男命の狼藉
   - ④天の岩戸事件
2. 須佐之男命の追放
   - ①八岐大蛇(ヤマタノオロチ)退治と出雲の国造り
3. 大国主命の神話
   - ①八上比売(ヤガミヒメ)への求婚の旅 ・ 因幡(イナバ)の白兎神話
   - ②八十神(ヤソガミ)の迫害
   - ③根の国訪問(須勢理毘売命(スセリビメノミコト)との婚姻)
   - ④奴奈川比売(ヌナカワヒメ)へ求婚
   - ⑤須勢理毘売命(スセリビメノミコト)の嫉妬
   - ⑥少名毘古那神(スクナヒコナノミコト)と国造り

2） 歴史としての読む主な神話 ②

4. 葦原中国(アシハラノナカツクニ)の平定（出雲の国譲り）

①天菩比神(アメノホヒノミコト)の派遣

②天若日子(アメノワカヒコ)の派遣

③建御雷神(タケミカヅチ)の派遣

- 事代主神(コトシロヌシノカミ)の服従
- 建御名方神(タケミナカタ)の不服従と服従

④大国主命(オオクニヌシノミコト)の国譲り

5. 天孫降臨(テンソンコウリン)

①天忍穂耳尊(アマノオシホミミノミコト) 降臨せず

②子の瓊瓊杵尊(ニニギノミコト) 降臨

- 猿田毘古神(サルタヒコノカミ)・猿女の君(サルメノキミ)・従者達
- 木花之佐久夜毘売(コノハナノサクヤビメ)

③火遠理命(ホオリノミコト)

- 海幸彦・山幸彦
- 海神の宮訪問
- 火照命(ホデリノミコト)の服従
- 鵜葺草葺不合命(ウガヤフキアエズノミコト)誕生

2） 歴史としての読む主な神話 ③

6. 神武東征

① 五瀬命(イツセノミコト)と3兄弟で東征の会議
② 筑紫の岡田宮・阿岐(アキ)国の多祁理宮(タケリノミヤ)・吉備(キビ)国の高島宮(タカシマノミヤ)
③ 浪速(なにわ)国の白肩津(シラカタノツ)
- 長兄の五瀬命が負傷、退却し、
  - 東から攻めることを宣言

④ 紀国の男之水門(オノミナト) （五瀬命死亡）
⑤ 熊野で暴風雨に遭遇 （残る2兄 海難死亡）
- 神武とその配下が熊野の荒坂津へ丹敷戸畔(ニシキトベ)を誅す
- 高倉下(タカクラジ)が剣発見、大和へ進軍

- 菟田 (ウダ)・国見丘・鳥見(トミ)など転戦

⑤ 大和入り
- 天津瑞(アマツシルシ)（天の羽羽矢など）を示されたことから、饒速日命(ニギハヤヒノミコト)が恭順し、戦闘終結
- 大和入りし、畝火(ウネビ)の白檮原宮(カシハラノミヤ)で即位
- 事代主の娘（伊須気余理比売(イスケヨリヒメ)）を皇后に選定

2） 歴史としての読む主な神話 ④

7. 手研耳命(タギシミミ)の乱と後継天皇

① 手研耳命の乱 （神武天皇の崩御後、九州から同行した子が権力奪取）
② 皇后(伊須気余理比売)の子：神沼河耳命(カムヌナカワミミノミコト)が、手研耳命を殺害、
③ 綏靖(スイゼイ)天皇として即位
　　✓ 綏靖天皇、事代主の娘(五十鈴依媛命(イスズヨリヒメノミコト))を皇后とする
④ 子の安寧(アンネイ)天皇が即位
　　✓ 安寧天皇、事代主の孫娘を皇后とする

✓ 以上 の話は、教科書にも歴史専門書にも出てこない。
　・ 実際にあった物語では無いのか？
　・ 事実と認定できないから、排除しているのか？
　　✓ 事実と認定する努力をしてきたのか？
　　➢ 事実と認定する努力・行動をとってこなかったと考える。

➢ 事実と認定する努力を払うと、どうなるのか、やってみよう！

II 神話を歴史として読むと云うこと

1） 文学として読むこととの違い

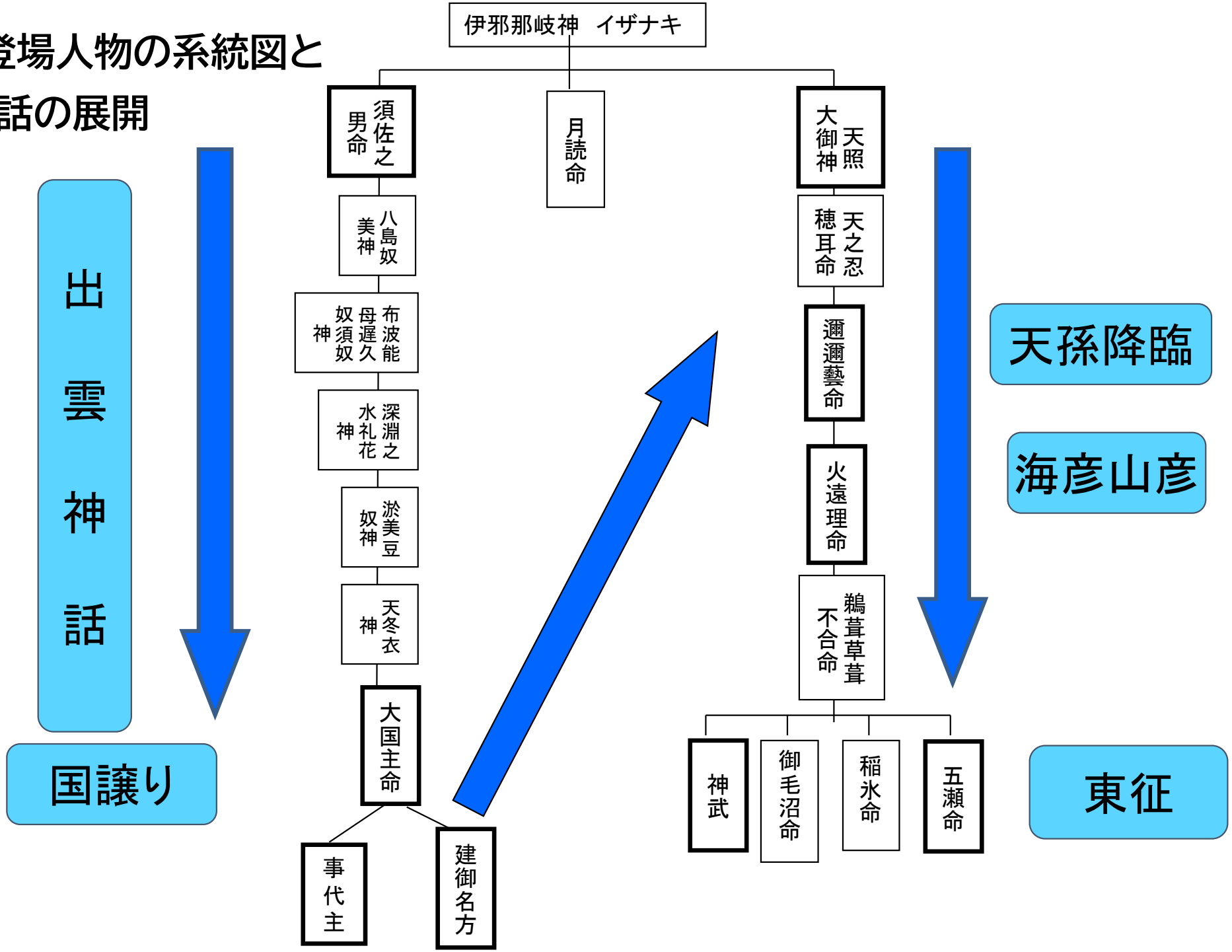
- ✓ 文学は、
  - 言葉と美の世界に重きを置き、
- ✓ 歴史は、
  - 時間と空間と事件・出来事の内容に重きを置く。

- 歴史として、神話を読むときは、
  - 文学者の解釈を頼りとするが、
    - 別の視点をもって、
  - 時間・空間、内容を整理しながら読み、理解すること
- 文献が正しく伝えているのか、検証する。
  - 検証に当たっては、考古資料、古地図・地理学、年代測定法、DNA検証など他の学問分野の成果を利用する。
  - 他分野の支援を受ける時も、その内容が正しいものか、歴史研究する人が、検証する必要がある。
    - 科学者の云うことを、検証せずに、利用することは、誤りの原因。

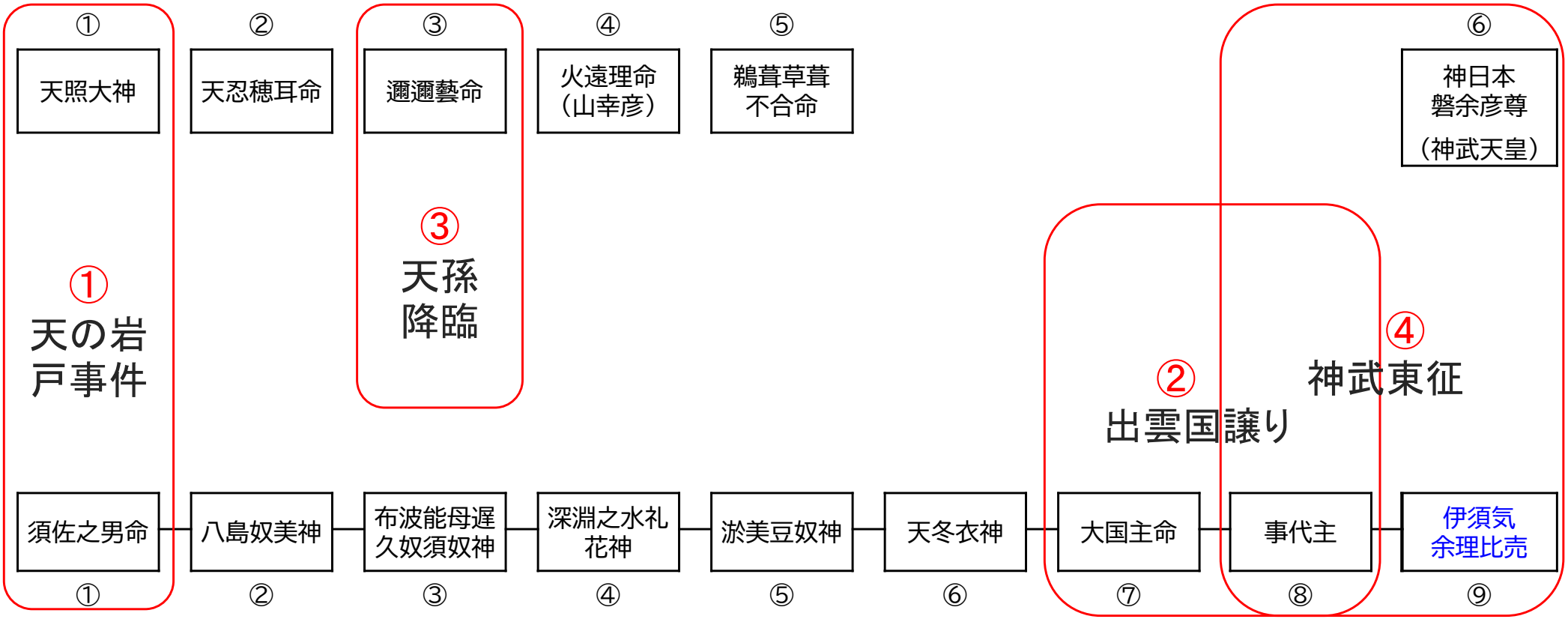
2） 時間軸の整理

- リストアップした神話の事件をたどってゆくと、
  - 神話の事件の順番と登場人物の辻褄が合わない気がする。
- そこで、時間軸を揃えて整理して行きたい。
  - 残念ながら、各々の事件の年代は分からない。
  - 日本書紀・古事記の年代については、正確ではないことが、既に、論議されている。
- 登場人物とその親子・子孫の関係が、一つの糸口になる。

- 登場人物の系統図と話の展開

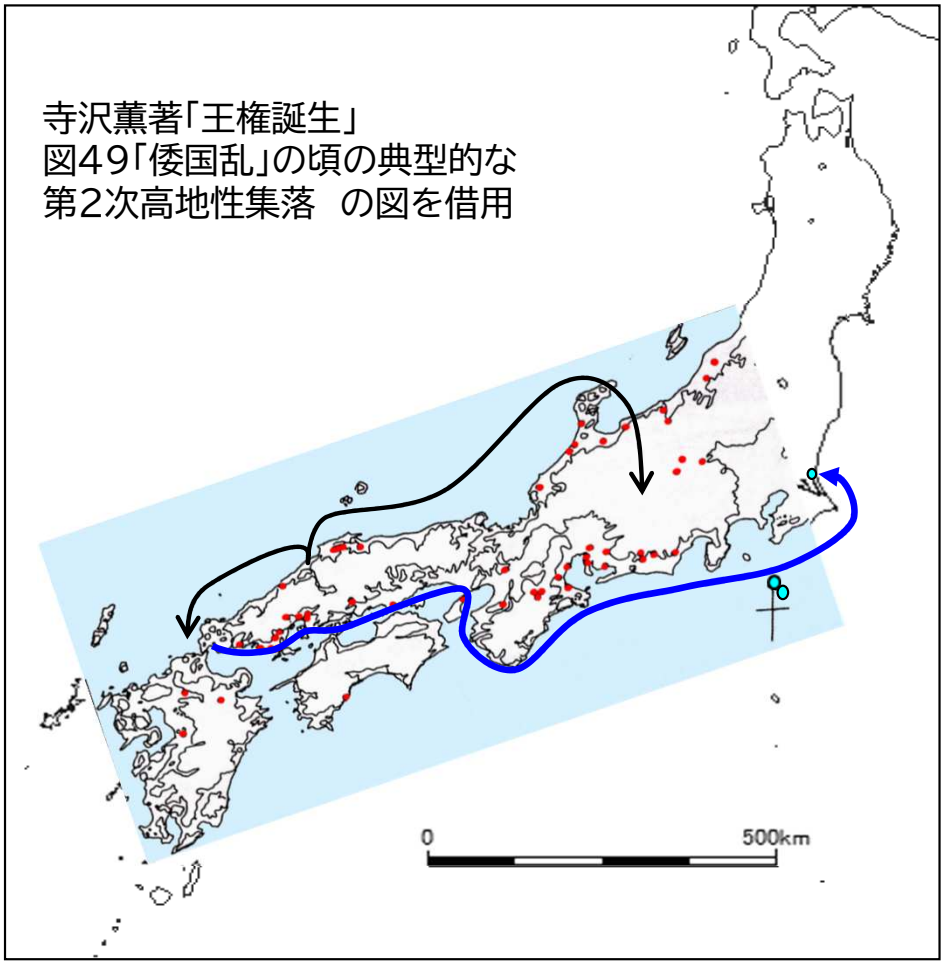


神話の事件と登場人物


①
天照大神
②
天忍穂耳命
③
邇邇藝命
④
火遠理命
（山幸彦）
⑤
鵜葺草葺
不合命
⑥
神日本
磐余彦尊
（神武天皇）
①
天の岩
戸事件
③
天孫
降臨
②
出雲国譲り
④
神武東征
須佐之男命
八島奴美神
布波能母遲
久奴須奴神
深淵之水礼
花神
淤美豆奴神
天冬衣神
大国主命
事代主
伊須気
余理比売
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨

III　事件の順番が判明すると

- 武甕槌神・経津主神は、高天原に呼び出され命を受ける。
  - 出雲へ行き、国譲りの談判を行う。
  - 建御名方を追い北陸・糸魚川から長野県・諏訪まで行き、降伏させ、
  - 出雲に戻り、国譲りで実現し
  - **<u>その結果を高天原にもどり報告。</u>**
  - 出雲の久那斗神を道案内人として、領土を受け取るために、人員を率いて、東端の鹿島・香取まで、行き住み着いたものと推測する。
- 神武東征の開始の描写を見てみよう。 東征の物語は、会議から始まる。
  - ✓ 古事記　：「いずこに坐さば、平けく天の下の政を聞こしめさむ。なお東に行かむ。」
  - ✓ 日本書記　：『東に美き地有り。青山四周(ヨモニメグレリ)。（中略）彼の地は、必ず以て大業(アマツヒツギ)を恢弘(ヒラキノ)べて、天下に光宅(ミチオ)るに足りぬべし。蓋し六合(クニ)の中心か。
- 会議の目的は、遷都先の選定　→　大和
- 順序が判明すると、神武東征の会議目的が、納得できるものになる。



寺沢薫著「王権誕生」
図49「倭国乱」の頃の典型的な
第2次高地性集落　の図を借用

Ⅳ 神武東征

① 大和攻略開始

- 九州を出発し、筑紫の岡田宮・阿岐国の多祁理宮・吉備国の高島宮を経由し、戦力を整え、いよいよ、大和を目指し、大阪湾から攻略を開始する。
- 古事記は、簡潔に記述され、日本書紀では詳細に記述されている。特に目立った矛盾はない。

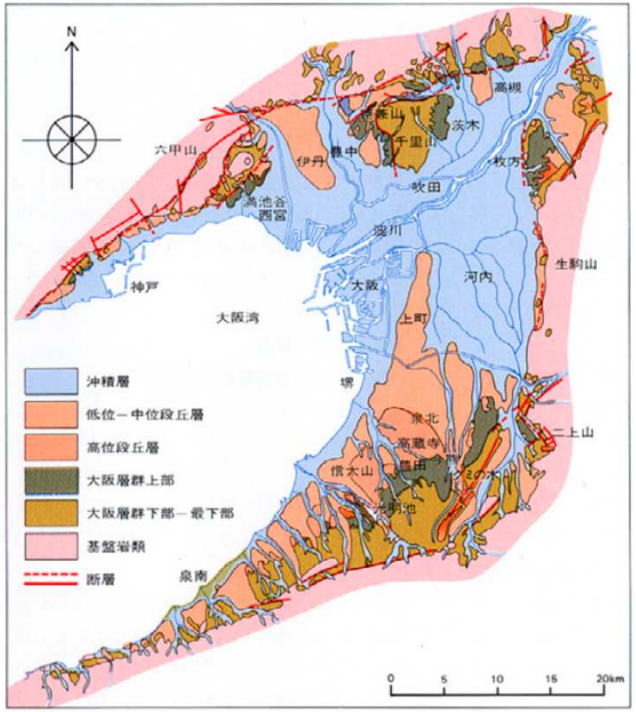
  日本書紀の記述に従い、経緯を示す。

  - 浪速の渡を経て、草香邑(クサカムラ)の白肩津(シラカタノツ)に至る。 4月
  - 徒歩で龍田(タツタ)へ向かう。難路で断念。
  - 戻り、生駒山を越えようとした。
  - 孔舎衛(クサカエ)の坂にて長脛彦軍と戦う。
  - 流れ矢が五瀬命の肘に当たる。「皇師(ミイクサ) 進み戦ふこと能わず。」
  - 「日に向かうのは間違い、日を背にして戦う」と神武軍撤退　東側から攻めるとの意味か。
  - 大阪湾を退き、南下する。
  - 五瀬命死亡、紀伊国の竈山(カマヤマ)に葬る。 5月
  - 名草邑に至る。 名草戸畔(ナクサトベ)を殺す。 6月

津田左右吉氏が疑問を示した神武東征の難波の白肩津や楯津が、復元された大阪湾の地図上に、上陸作戦の好適地として存在することが判明した。
　疑問の提示が、逆に、実在の証明になった。
歴史上の新しい事実が発見された時点で、歴史観を再検討すべきだったと、私は考える。

桂川光和著　日本建国史
http://kodai.sakura.ne.jp/nihonnkennkokusi/index.html

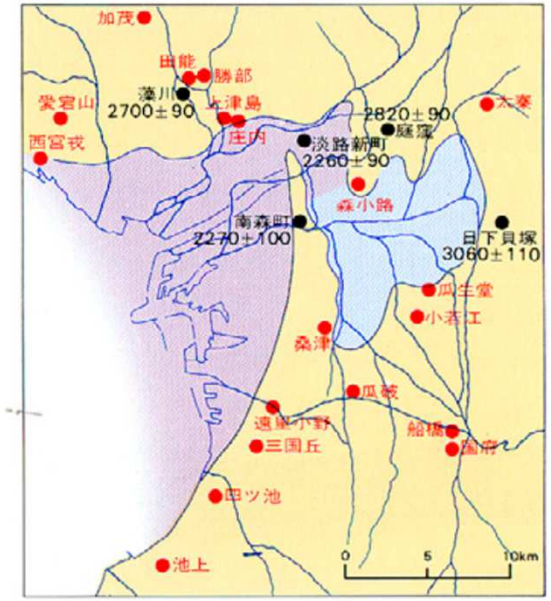
図１－大阪地域の地質図 〈市原，1966年〉



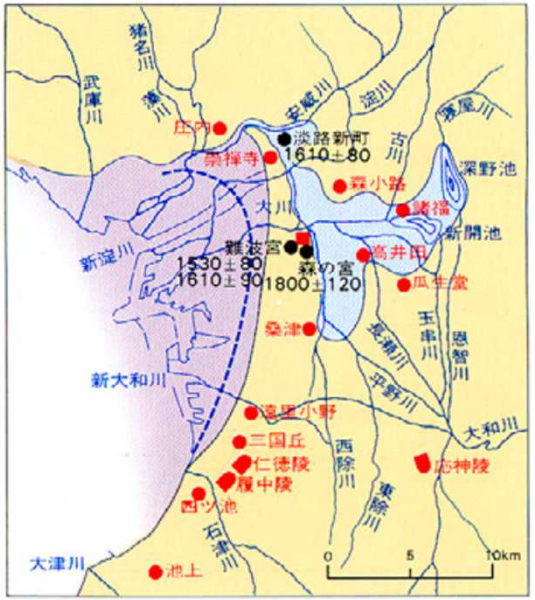
大阪の古地図

- 大阪は左の地質図の通り、固い地層と沖積域に分かれる。
  - 沖積層は、当時は、図のように、海と河内湖の水域になっていた。
  - 弥生時代の遺跡も、当時の陸地に有った。
- 津田左右吉の古代史批判で、白肩津で上陸したと云うのは、虚偽と決め付けたが、古地図が復活すると、海に繋がる水面が存在し、その岸に地名が存在した。 真実の証拠となった。

C.河内潟の時代〈約3000－2000年前・縄文時代晩期－弥生時代前半〉の 古地理図



D.河内湖Ⅰの時代〈約1800－1600年前・弥生時代後期－古墳時代前期〉の古地理図



資料・第四紀の日本列島――４

大阪層群と大阪平野

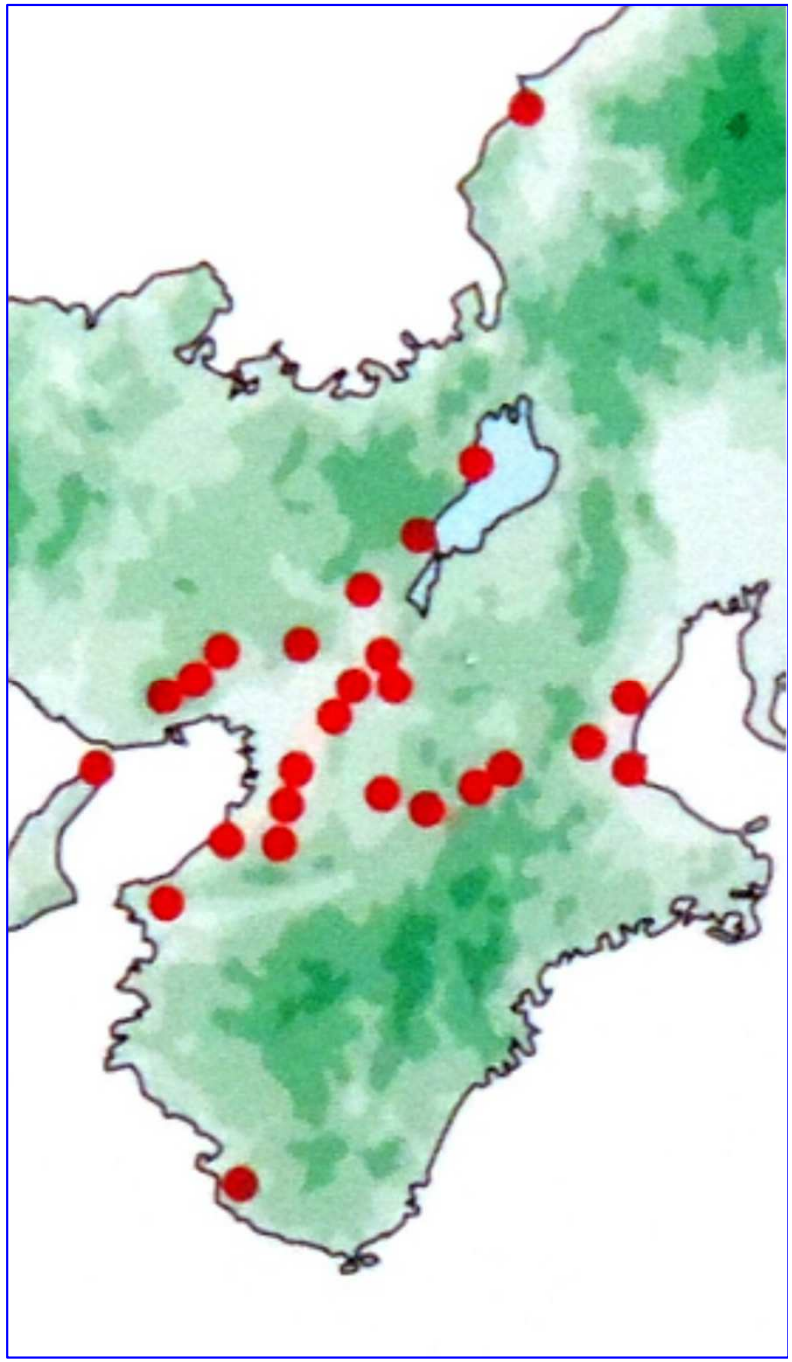
市原実＝大阪市立大学理学部助教授

神武東征の経路と第二次高地性集落

- 戦争に関わる遺跡である高地性集落を見る。
  - 高地性集落は、交通の要所に見張り台を兼ねて作られた場合は、恒久的に、長期間使われたケースや、極めて短期間だけ存続し、特定の戦争・戦闘のために、見張りと戦うための山城として作られたケース、やや長期間に渡り存続し、敵の襲撃に備えたケースなどがある。
- 若林邦彦氏の『「倭国乱」と高地性集落論・観音寺山遺跡』に掲載されたを見ると
  - 白方津から龍田のルートに沿って、高地性集落が並んでいることが判る。
- 龍田から大和川を遡り奈良盆地に至る付近には、
    - 饒速日命と、随行した物部氏一族の拠点地域が並んでおり、
    - 庄内式土器・布留(フル)式土器の産地ともなっている。
    - 饒速日命側の要所であって、守備を固めていた処と推定される。
  - 従って、五瀬命・神武軍が徒歩で進もうとして龍田へ至るルートは、大和を守備する側の軍備や設備が整った地帯。

  - ➢ 日本書紀に記すように、単に「其の路狭く嶮しくして、人並み行くこと得ず」 では無く、
  - ここでも激戦が行われ、五瀬命・神武軍が退却を余儀なくされた結果を、日本書紀ではさらりと「路が狭く、嶮しかった」と記したものと、考える。

➢ 考古資料の戦争遺跡を丹念に追うと、記紀神話に記された地名や事件と一致することが多くみられる。 この戦争遺跡が理解できると、記紀神話がリアルに、現実性をもって解釈できる。



弥生時代後期から古墳時代初頭の高地性集落
「倭国乱」と高地性集落論・観音寺山遺跡
若林邦彦 著　より

② 熊野灘の遭難

山岳・丘陵文の緑の彩色
高地性集落の赤点
青の行動線と赤の点線
丸地が追記したもの

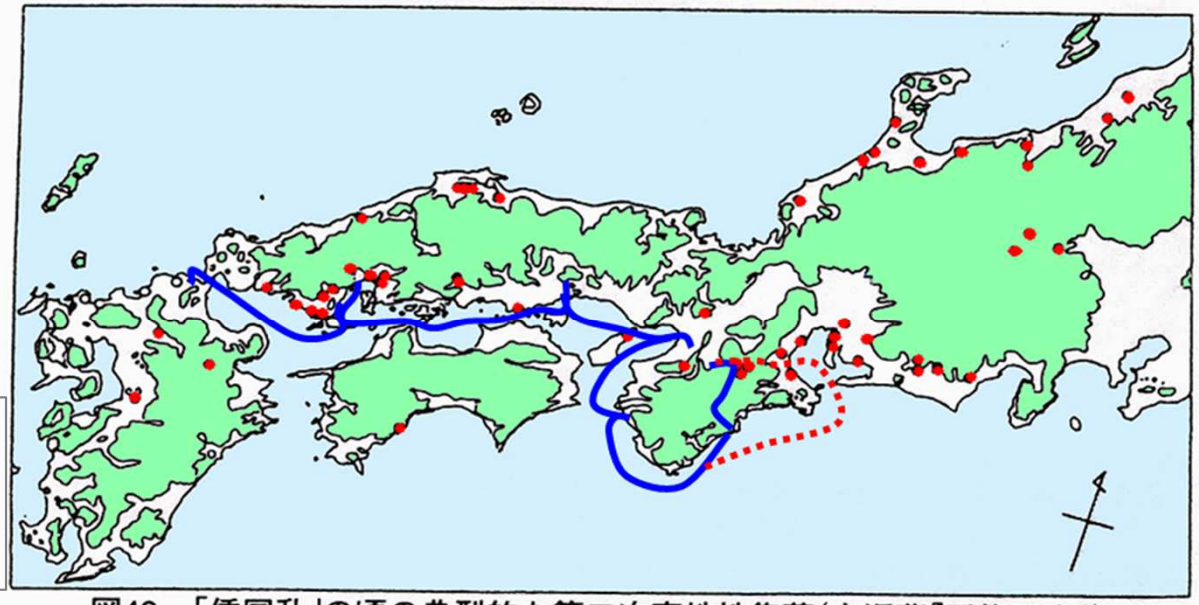


図49 「倭国乱」の頃の典型的な第二次高地性集落（寺沢薫『王権誕生』）

- 指揮官の五瀬命を失った神武軍は、その後、海路を順当に航行し、熊野に至り、天磐盾（アメノイワタテ）（現在も観光地であるゴトビキ岩）を登るとの記述がある。

- 日本書紀には、「海の中にして卒（にわか）に暴風に遭ひぬ。」とあり、神武の兄二人が遭難死する場面が記述。
- 古事記では、この遭難の記述は無い。 神武の二人の兄は、その誕生の記事に、「波の穂を踏みて常世國に渡りまし」「妣国（母の国）である海原へ入り坐（マ）した」とだけ記し、熊野灘の惨劇の記述を回避したと考えられる。
  - 神武の兄二人が遭難したことは、艦隊の大多数が遭難したと考える。
  - 上陸する時は、重い刀や武器を捨て、身一つで高波の中、岩場や浜に泳ぎついたと想像する。
    - 九州から運んできた貴重品・武器・武具などは全て、海中へ沈み、失ったと推定。

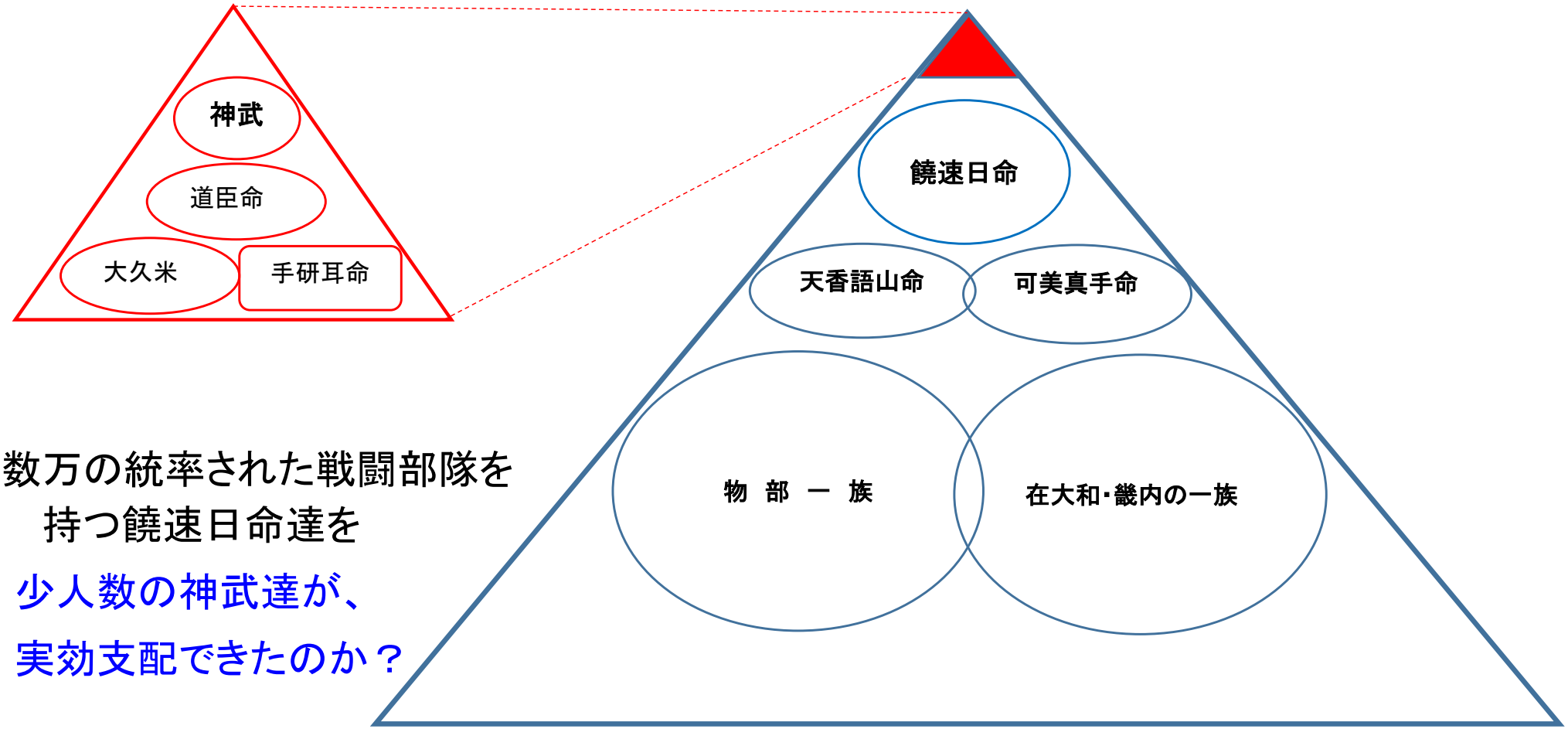
- 考古学者は、神武東征に疑問を投げかける人も多い。その理由として、九州から畿内に、大挙して人が移動したならば、大量の九州産土器などが発見されるはずだが、出土しない。鏡・武器なども、出土しない。技術も移転したようには見えない。だから、神武東征は無かったのだ。
  - 熊野遭難の記述を読めば、神武軍と一緒に到着するはずだった土器・鏡・武器、さらに、技術を持った人々も全て、熊野灘に沈んでしまったため、失われたことが判る。
  - 考古学者の指摘は、鋭いものが有るが、文献と照らし合わせると、その答えが明らかになる場合がある。熊野灘の遭難はその例と云える。

③ 大和朝廷成立時の神武一行

- 大和入りした時、神武一行の中で、九州から随行した主だった人々は？
  - ・ 道臣命（大伴の祖） ・ 大久米 ・ 手研耳命
    - 固有名詞の出てくる人はこの３人。
      - 久米歌の場面から、久米の人々が複数いたことが推定される。
        - 椎根津彦（しいねつひこ）＝珍彦（うづひこ）は、途中随行者
        - 高倉下・八咫烏などは、熊野より随行した人々
  - 九州から随行した人々の持ち物
    - 熊野灘の遭難で、装備してきた甲冑・武器（重い金属製品）などは、全て海中に没し、携行できたものは、身の回りの品物だけと推定される。
    - 天孫族の印である天羽々矢一隻と歩靫は、かろうじて帯同して持ち出したものか？
      - 大和侵攻のため携行した武器は、丹敷戸畔から調達したものと推定される。
- 大和入りした時の神武一行
  - 九州から随行した人員は、上記３人＋久米一族など。及び、吉備などから参加した若干の人員。
  - 熊野より随行した人々、及び、その後、傘下に入った宇陀の弟猾など。 千人程度か。
- 饒速日命（ニギハヤヒ）傘下の大和防衛軍。
  - 九州から饒速日命に随行した物部一族
  - 畿内在住の弥生渡来系の人々・出雲の支配下に居た人々
  - 饒速日命の支配下に入って居た先住民（ツチグモ・縄文人）
- 大和朝廷成立時の状況
  - 九州から神武に随行してきた人員は、少人数で、大和朝廷を成立させた。
  - 大和朝廷の大多数は、饒速日命一族と出雲一族で構成されていた。

大和に入った神武一行と饒速日命

- 神武達は、熊野から随行したメンバーは、数十名と推定。
  - 海難事故で生き残り、随行できた九州からの人員はもっと少ない。
- 一方、饒速日命達は、
  - 九州から饒速日命に随行した物部一族が多数の兵士を支配下に置く。
  - 長髄彦の傘下にあった兵士多数を、可美真手命（長髄彦の妹との子）の下に置く。



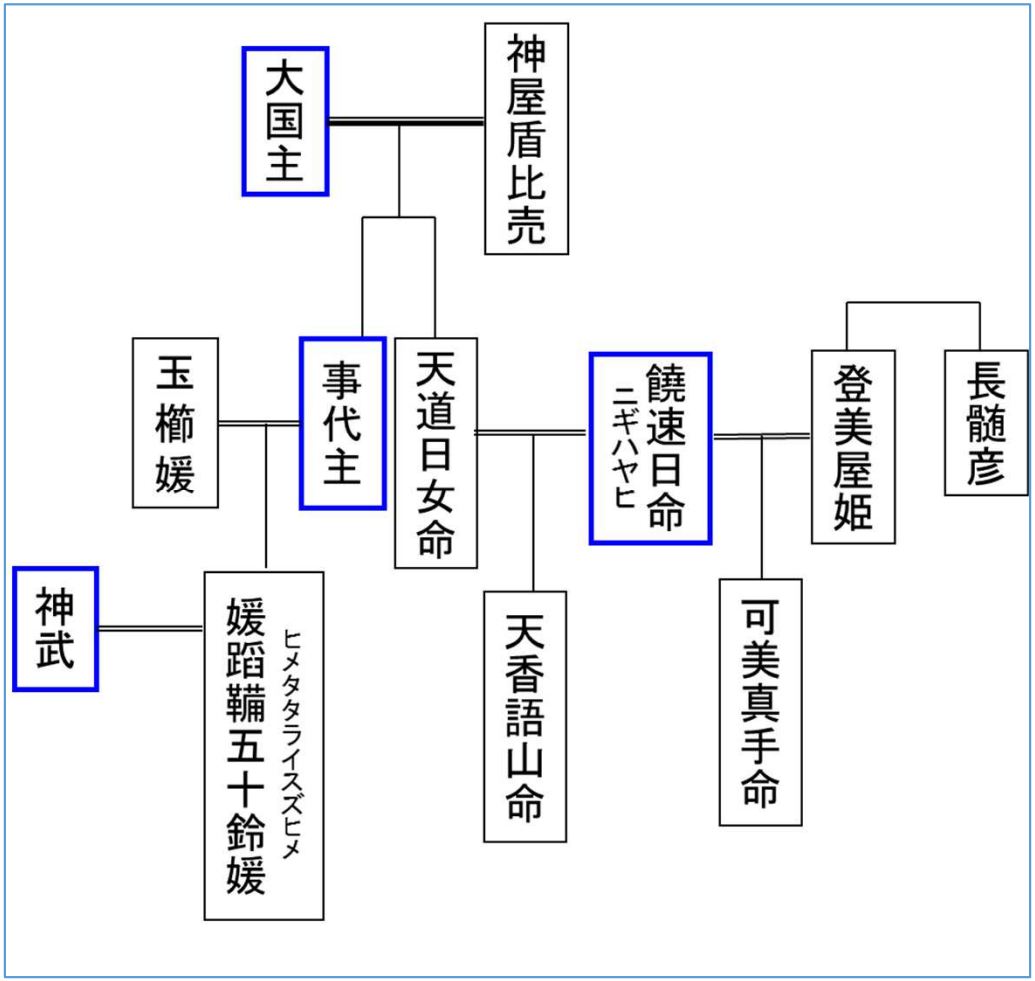
- 数万の統率された戦闘部隊を持つ饒速日命達を

少人数の神武達が、

実効支配できたのか？

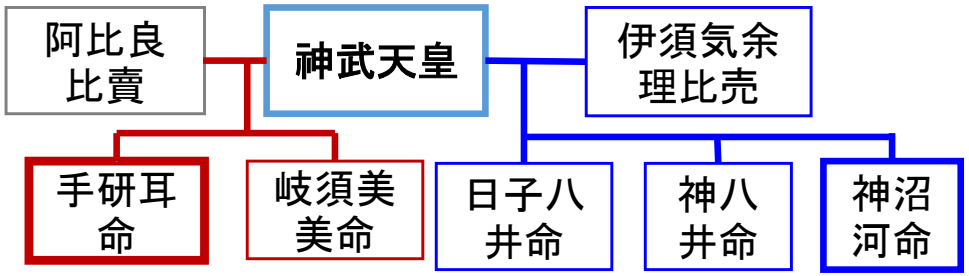
神武達の最初の政策実行

- 政略結婚
  - 饒速日命は、大国主命の娘・天道日女命と結婚していた。
    - その妻の兄が事代主。
  - 大和・畿内を支配してきた事代主は、この時代にも大きな影響力を持っていたものと推測される。
  - 事代主は、三輪山・大神神社に祀られる。
    - 大和の守護神。別名、大物主。
  - その娘に適齢期の媛蹈鞴五十鈴媛がいた。
- 九州に正妻を残してきたが、神武は、政略結婚に踏み切った。
  - 大和入りした年
  - 神武、正后妃として、事代主の娘を迎える。（日本書紀）
- 大和を譲った饒速日命とその部下達にとって、神武は、敵対し難い存在となった。
  - 敵対すれば、ボスである饒速日命と事代主に仇することになってしまった。
  - この政略結婚は、神武側にとって、きわめて有効な政策であったと云える。



Ⅴ　手研耳命（タギシミミノミコト）の乱と後継天皇

- 神武の死後、破廉恥な事件が起きている。
  - 神武の九州時代に生まれた息子の手研耳命が、神武の皇后であった伊須気余理比売を強引に娶り、政権を奪取した。
  - その後、伊須気余理比売と神武の間に生まれた子が、手研耳命を殺して、二代目の天皇となっている。



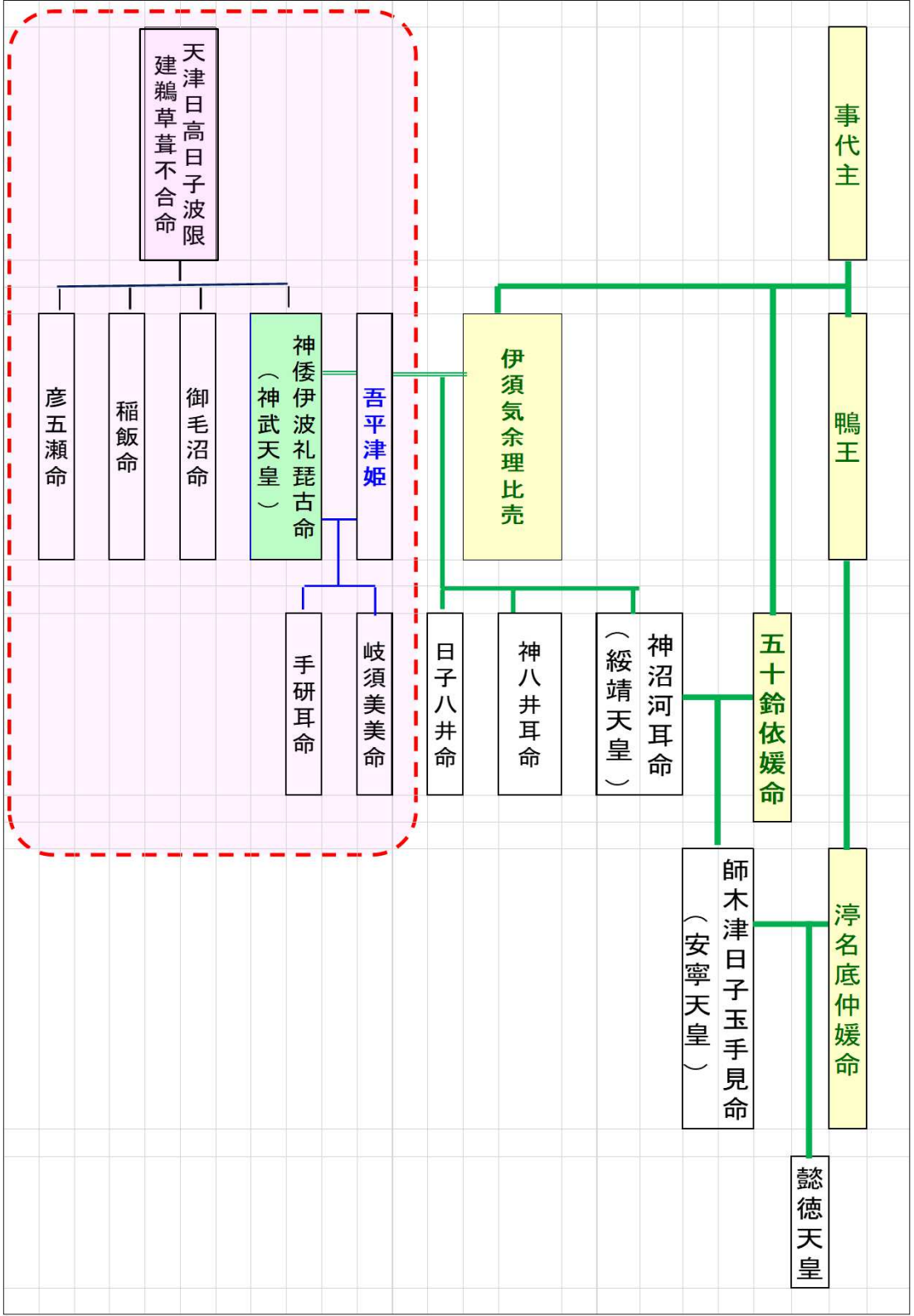
- この乱が、その後の社会や記紀の記述にも、与えた影響は大きかったものと推定する。
  - 手研耳命の乱に加担した人々は誰で有ったろうか。
    - 熊野灘の遭難を超えて、大和を勝ち取った九州から同行してきた人々は、どちらの側に付いたのだろうか？
    - 共に戦ってきたメンバーの絆は固いものだったと考え、九州から同行した人々が手研耳命の側に付いたとする推定する。
    - 手研耳命の乱が収束する時には、主要なメンバーは、抹殺されたのではないかと懸念する。
- 九州から来た天孫族の一族の多くが抹殺されたはず。
  - 初代神武の皇后は事代主の娘、二代綏靖天皇の皇后も事代主の娘、三代の安寧天皇の皇后も事代主の孫娘。
  - **事代主の権勢の大きさが覗われる。**

- この結果、天皇家には、九州時代からの天孫族の風習・伝統行事を伝える人も居なくなったと考える。
  - 又、伝承を伝えるも失われ、過去を伝える記述が不正確になったのではと、危惧する。
  - 天孫系の世代の少なさや、神武東征の出発からのルートの不正確な記述なども、ここに原因があるのかも知れない。

大和朝廷成立期に力を持った勢力

- 神武が死去。 後継者問題が発生
  - 神武と九州から来た息子の手研耳命が、神武の皇后を娶り、政権強奪
  - 大和で生まれた息子達が手研耳命を殺害
    - この時に、手研耳命に加担した九州から来た勢力は一掃されたと見る。
- 後継者となった綏靖天皇は、事代主の娘を皇后とした。
- その子の安寧天皇は、事代主の孫娘を皇后とした。
- その子が、懿徳天皇となった。

- 大和朝廷の天孫系は、神武と九州時代の息子。神武が死に、九州からの息子とその勢力は一掃された。
- 九州からの天孫系は、かろうじて、天皇家の血筋として残ったが、三代に渡り事代主の娘・娘・孫娘が皇后に就き、事代主の血筋が濃いものになった。
- 初期に、実質上最も力を持っていたのは、事代主だったのではないか。
- 記紀に、出雲神話と出雲系子孫の記述が多いのは、出雲系が全盛の時代があったためか？



VI.　まとめ と 展望

- 戦後75年たった現在の古代史への問題提起を行った。
- 「歴史として読むこと」は、時間軸と空間を整理し、物語の内容を把握、考古資料などと対応関係をすること。科学的な情報も、大きな支援となる。
- 天岩戸事件から、一連の神話・物語を「歴史として読み直す」と、従来の理解とは異なる順序で事件が発生したことが判明した。
    - 天岩戸事件→出雲神話→天孫降臨→出雲国譲り→神武東征
- この順序で記紀神話を読み直し、「神話」が「歴史」となった一つの例を示した。
    - 神話が、「史実でない」とした証拠が、逆に史実であることの例。
    - 考古学上、提起された課題が、記紀神話によって解決される例。
    - 単なる神話として読み飛ばされてきた事実が、歴史上、重要性な意味を持つことが理解できる例。
        - 政略結婚＝神武天皇と事代主の娘の結婚
            - » 出雲系の事代主の歴史的な重みが増大
        - 手研耳命の乱の処理で九州から来た勢力が排除
            - » 出雲系の躍進
            - » 天孫族の九州時代の伝説の曖昧さの主要因では
- 「歴史として読む」ことにより、神話が事実であったとなると、出雲神話等にある出雲族の動向が気になる。これが事実で、歴史として語れるとなると、さらに興味深い歴史となる**展望**が生まれる。
    - 大国主命の国造り＝出雲国の広がりと産業
    - 神庭荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡で発見された大量の銅鐸と銅剣・銅矛
    - 勾玉・管玉の産地と流通ルート
    - これらに関わる姫たちの物語
    - 戦争遺跡

➢ 日本古代史は、一気に面白い物語性を持った歴史となると期待される。